

# がんと向き合う

ゲスト 絵門ゆう子さん (エッセイスト)

藤森 宗徳 県医師 会長

秋葉 則子 県医師会 理事

このトークは、昨年末に県医師会館に絵門さんをお招きして行なうたものです。終了後、絵門さんは医師会の忘年会にも参加され、歌まで披露してくださいました。今を生きていることにひたむきな絵門さんの姿に、私たち医師は感動をしく、励まされました。

その絵門さんが本誌の発行準備中に急逝されました。絵門さんの言葉は、がん患者さんのみならず患者さん全般に勇気を与えるものです。さらに、医師に対しては「患者から希望を奪わないで」というメッセージを遺されました。この言葉を重く受け止めなければならぬと痛感しております。

絵門ゆう子さんのご冥福を、心よりお祈りします。  
(広報担当理事 吉岡 英征)

**秋葉** 絵門さんは、八千代市にお住まいとか。私の地元なので、とても親しみを感じます。アナウンサー時代も存じ上げておりますが、ここ数年はがんの患者さんのお立場からの講演・朗読コンサート・執筆などで活躍中ですね。そのエネルギーの源泉はどこにあるのでしょうか？

**絵門** 与えられた命を最後の1秒前まで、笑顔で燃焼させたいという思いが、生きるエネルギー源になっています。日々をどれほど楽しく、どれほど必死で生きるかが、命を与えられた者としての務めだと思っております。

私が乳がんの告知を受けたのは2000年で、やがて全身転移したことを知らされ、始めは医



藤森宗徳 県医師会長

療を拒否しました。「治療よりもがんとの共生が課題」と、前向きに明るく生活していたのです。でも、あるお医者さんの「心ある医療」と出会い、現在は医療の助けを借りて私の細胞が心地良く生きられる道は、私の責任で見つけ創り出すものだという考えに行き着きました。

**藤森** 今の絵門さんの言葉は、医療のあり方の根源に関わるものだと思いますね。一般的には「病氣イコールお気の毒」という構図で語られがちですが、それではいつまで経っても堂々巡りで何の解決にもなりません。患者さんは「どうして自分が病氣にならなければならぬのか」といった被害者意識を抱くものですが、そこにどまっただけでは病氣に負けてしまいます。前向きに病氣と向き合う、という気持ちが大事です。

**絵門** やはり、病氣って自己責任だと思っんで

す。かと言って、そのことで自分を責める必要はありません。生きるも死ぬも自分が一人で引き受けるという覚悟があれば、どう病氣と付き合っていくべきかが分かってきます。でも、一般的にお医者さんって患者に対して優しいものですから、ついそれに甘えて自己責任を転嫁してしまっ人も多いのではないのでしょうか。お医者さんは、時には患者を突き放すということがあっても良いのではないかなと思います。

**藤森** それは患者さん次第でしょうね。一般論としては患者さんは医師に「おまかせ」という風潮が強いですが、絵門さんのような患者さんは、ある意味で医師にとって頼もしく、また手ごわい相手ですよ笑。

**絵門** でも、病氣が自分自身の問題である以上、納得できる形で治療を受けたいですね。そのためには、自分に合ったお医者さんを選ぶことが大切だと思います。私の場合は、幸いにそうしたお医者さんに巡り会うことができましたが、それがなかったらと医師を拒否していたかも知れません。

実は、病と向き合う私の仲間や読者の方から、患者に対して心ない言葉を投げかけたり、本人が望みもしないのに余命を告げるお医者さんの存在をしばしば耳にします。その度に憤慨する

私ですが、患者はお医者さんに「ぶったり」ではなく、もっとフリーになるべきだと思います。そうでないで、心にわだかまりを持ちながら治療を受けることになりませう。私の主治医は、先端医療云々以前に人間性で選びました。

**藤森** 患者さんと医師には、相性がありますからね。私は小児科ですが、子どもさんだけでなく、付き添って来られる保護者の方との相性もありますから大変です(笑)。ちょっとした病気なら気を持ちようで治る場合が多いのですが、相性が悪いと治療効果に影響します。たとえ名医と言われる医師に出会えたとしても、お互いに性が合わないといつこともあります。それを我慢して治療を受けるといつのは、けっしてプラスにはなりません。

ん。治療を意味する「テラピー」の「テ」は、言葉「いつ」とです。ですから、医師の言葉は治療の一環として今後ますます重視されるべきです。それを考えると、医師は患者さんに対する言葉の技術をもっと学ぶ必要があるでしょうね。

**秋葉** その意味でも、医師は患者さんに向けて発する言葉について、それがどのように伝わっているかについてきちんと検証をすべきではないでしょうか。医師のさりげない一言が、患者さんにとっては大ごとになるのですから。

**絵門** ええ。私の身近には、余命1か月と宣告されて、半年も経つのにまだピカピカに輝いて生きておられる方がいらっしゃいます。あるべ

テランのお医者さんは、”人体には摩訶不思議といふことがある”とおっしゃっていましたが、私自身がこうして生きているのも摩訶不思議のなせるわざという思いがします。

変な話ですが、私は自分より症状がひどくて元気な方に出会いたいと願う気持ちが日毎に強くなってきました。奇跡に出会いたいという気持ちですね。がんは不思議な病気です。えっ？と思う人が治ってしまうことが本当にあるんです。究極のところまで行っても、希望を捨ててはいけなと思いますね。本人が生きる力を、周囲はもっともって信じてあげることが大事です。そして、本人も生きる執念を持つ。そういうところに奇跡は起こるのだと思います。私は、がんの特効薬は今日はないけれど、”もしかすると明日できるかも知れない”という希望を抱いて生きています。

**藤森** 今のお話をうかがいながら、先日放映されたNHKテレビのドキュメント番組「多田富雄の闘い」を思い起こしてありました。多田先生は元千葉大教授、前東大教授で免疫学の世界的権威で、私は3年後輩にあたります。4年前に重度の脳梗塞で倒れられ、右半身麻痺、言語障害に加え、食事もままならない状態が現在も続いておられます。にもかかわらず、先生は毎日リハビリと言語訓練をしながら、5冊の新作を著され、お弟子さんたちの研究の指導をされ、趣味のお能を楽しまれています。



絵門ゆう子さん

**えもん ゆうこ プロフィール**

1957年、東京生まれ。津田塾大学卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。「NHKニュースワイド」他を担当後フリーとなり、キャスターや女優としても活躍。講演、朗読コンサートなどを通じ、がん患者への情報提供や心のサポートなどを積極的に展開。著書に『がんと一緒にゆっくりと』『がんで私は不思議に元気(以上、新潮社)』『絵門ゆう子のがんとゆっくり日記(朝日新聞社)』『ありがとう(PHP研究所)』絵本『うさぎのユック(金の星社)』などがある。2006年4月3日、逝去。

多田先生が、あえて不自由な日常のテレビ取材を許されたのは、人間はどんな状況にあっても飽くなき努力を続けるべきだという信念を、身をもって伝えたかったからだと思つたのです。

**絵門** 以前は、障害を恥ずべきもの、隠すべきものという風潮がありました。最近ではオープンになってきました。私もがん患者というところをオープンにして、がん患者の方やそのご家族のカウンセリングの一助になればと、産業カウンセラーの資格も取って活動をしてまいりました。そうした活動を通じて痛感したのは、がん患者ががんそのものに参るより、がん患者であることに疲れていくことです。こういつた点に考慮した医療を期待したいですね。

**藤森** 病人扱いをすると、病人になるといふことはよくありますからね。絵門さんは現在、どのような治療を受けておられるのですか？

**絵門** 抗がん剤をやめて5カ月になるのですが、主治医には1カ月ごとに今後どうすれば良いか提案してくださいとお願ひしています。私自身は、うまく表現できませんが、自分の身体が何かをしようにしているという感じがあるのですけれども…。もっか、摩訶不思議を期待しているところですね笑。

これまで、さまざま療法を試みてきましたが、“これでがんが治る”と謳ったものは本物ではないというのが私の実感です。それから、医療

に関するマスコミの報道も偏つたものが多いことは、かつてジャーナリズムに関わつた一人として残念でなりません。特殊な例を興味本位に取り上げ、それを安易に「コース」として流すということが横行しています。医療ミスの問題にしてもあつてはならないことですが、ごくごく一部のことなのに医療界全体が悪いというイメージが形成されてしまっています。

**秋葉** それは私たちもよく感じることです。多くの医師は、誠心誠意で治療にあたっています。そのことは、患者さんご自身が最も良く分かってくださっているはずですが、にもかかわらず、一つの医療ミスが報道されるとマスコミは寄つてたかつて報道合戦を繰り広げる。このギャップが、日本の医療の正しい発展を妨げていると思えますね。

**絵門** 最近のマスコミが取り上げるのは、悪い話

ばかりです。その悪い「コース」が人間を歪めさせていることを、報道する側はもっと考へるべきでしょうね。伝えるべき真実は、他にたくさんあるはず。世の中が殺伐としているのは、マスコミの責任も大きいと思えますね。医療を本当に良くしたいのなら、素晴らしい「コース」を悪い「コース」以上に取り上げるべきです。

**藤森** 私どもの思いを代弁していただき、ありがとうございます。医師会は現在、地域医療に積極的に取り組んでおります。地域住民の方々の“目線”に立って、医療をどのように再構築すべきかがこれからの課題です。そのためにも、患者さんが医師に対してどう思つておられるかといった意見、ご要望について真摯に耳を傾けなければならぬと痛感しております。今日の絵門さんのお話は、私ども医師にとつて非常に参考になりました。また、がんの患者さんにも大いに励みになることでしょう。ありがとうございます。

**絵門** こちらこそ。私は今、毎朝起きるたびに「ああ、ありがたい」と思います。それは、「こんなに辛く苦しいのなら、明日がないほうがまだまし」と思つた時期を経験したからです。多くの人のとつて“ただの朝”が、それだけで嬉しくなるのです。ある時、夫がこんなことを言いました。「ゆう子が死ぬとしたら、がんではなく過労死だよ」。そして、落ち込んだ時の呪文は「がんなんてへの力ッパ！ がんだつて私は生きる！」なんです笑。



秋葉則子 県医師会理事